

# 黙示録の記録

## 第1章 栄光のうちにある人

著／ヘンリー モリス

訳／宇佐神 正海

## 黙示録の記録

### 目次

序章 未来をひもとく書

第1章 栄光のうちにある人

第2章 しみやしわやそのようなもの

第3章 誘惑の時

第4章 御座の周り

# 第1章 栄光のうちにある人

## 最後の使徒

イエス・キリストが死んでのち復活され、天に帰られる直前に、キリストは愛された使徒ヨハネについて「わたしの来るまで、彼が生きながらえるのをわたしは望むとしても、それがあなたに何のかわりがありますか。あなたは、わたしに従いなさい。」〔ヨハネによる福音書21章22節〕と。ペテロに話されました。

イエスは、キリストの再臨までヨハネが生き残っているとは言われなかったが、弟子たちはしばらくそのように判断していました。それはペテロの質問に対するイエスのあいまいな答え方にあつたのです。事実、入手し得る記録と伝承によると、ヨハネは他の11名の弟子の誰よりも長生きし、すべての弟子たちが殉教の

黙示録

死を遂げてから長い年月、六十年以上経った時、ヨハネが他に類を見ない黙示録のことはを書いたのです。

キリストは、再臨の時を故意にあやふやなままにしておき、弟子たちに、常に目を見張り用意していなければならぬと明確に述べていました「マタイによる福音書24章42節から44節にあるように」。したがって、少なくとも彼らが生きて知る限り、また創造主の預言が示している限り、キリストは、実際にキリストの話を聞いた人々が生きている時代に帰ることもありえたのです。弟子たちが実際にキリストの来臨が彼らの生存中にあることを信じていたことは、聖書の多くの箇所から明らかです「イヨハネの手紙2章28節、エテサロニケ人への手紙4章16、17節」。

このことは、それに続くどの世代の人にとっても真実です。主の僕すべてが主の再臨を期待し、キリストがいつ帰ってくるか分からないし、現在も同じ状態にあることを知って、主の僕すべてが主の来臨の備えをして生活する事を望んでいました。そして最後に「来るべき方が来られる。おそくなることはない」「ヘブル人への手紙10章37節」時が来るのです。

ある意味で、ヨハネは実際にキリストが来られる時まで、生きながらえたのです。素晴らしい「主の日」【黙示録1章10節】、ヨハネが黙示録を受け取った時、キリストは、ヨハネの面前に戻って「来」た（または、ヨハネは天に携え上げられた）のです。それで、ヨハネは愛する主をもう一度見たのです。さらに、ヨハネは、キリストが最終的に地球に再び来られる出来事に伴うすべてを「見る」ことを許されました。それで、ヨハネの時代から終わりの日に至るまでのすべての信者の教訓と激励のために、それらの見たことを書き記しました。私たちは、今日、ヨハネの目と耳を通して、キリストが帰ってこられるときに起るこれらのすばらしい出来事すべてを見聞きする特権に預かっているのです。

**黙示録1章1節** イエス・キリストの黙示。これは、すぐに起るはずの事をそのしもべたちに示すため、神（創造主）がキリストにお与えになったものである。そしてキリストは、その御使いを遣わして、これをもしもべヨハネにお告げになった。

「黙示」ということは、ギリシャ語のアポカルプシスで、文字通りには「覆いを取り除く」または「覆いを取り去る」ことを意味します。このように、この書は不可解なまたは人を困惑させることを意図した書ではなく、問題を解明し、明らかにする書です。この書の冒頭の言葉で、ヨハネは、イエス・キリストは、たとえ今は栄光のうちに天に挙げられたとしても、依然として、甦よみがえられた人だという驚くべき事実を強調しました。キリストのうちに保たれ続けている人としての御性質（全知全能の創造主であるが）をもって、キリストは、ご自身のしもべである人々の道しるべと祝福のために、この預言的啓示を、キリストの僕たちに明らかに示す権威を完全に保持して、将来起こらうとする覆われた出来事を明らかにするために、この啓示を父なる創造主から受け取られました。

啓示された事はすべて、すぐに始まり成就するはずで、「すぐに」と訳されている言葉は、文字通りには「短時間で」を意味します。たとえば実際には多くの年月がなお残っていたとしても、原則として、少なくともヨハネの書の最初の読者に関する限り、またはその後のいつの世代の読者に関してもキリストの来臨は、殆どすぐであり得たのです。さらに、キリストが語っておられる永遠の枠組みから見ると、数千年であろうと「わずかな期間」に過ぎません。

啓示は、イエス・キリストの「しもべ」（文字通りには「奴隷」）を導くためのものでした。そして、キリ

ストはそれを伝えるために特に愛されたしもべを用いることにしました。そして、数えられないほどの差し迫った大きな危険と迫害の中で、準備ができる時まで六十年の間、彼の生命を保護しました。啓示の意向を知らせた天使は、ここではどの天使かは示されてはいません（けれども、黙示録22章6節から9節で、ヨハネや他のキリストのしもべたちと「同じしもべ」と証言されている）。しかし、御使いはだれであろうと、彼はキリストの力と権威によって、この書の大きいなる幻と啓示の意向をヨハネに「知らせ」、「説明する」能力を持っていました。【黙示録22章6節】。「意向を知らせる（英語：signify）」ということばは「しるし」とか「奇跡」に密接に関連しており、ヨハネが見ることのできた驚くべき預言的幻の驚異的な性質に言及していると言っても良いのかも知れません。他方、このことばは、たまたま「同一視する（英語：identify）」あるいは「特定する（英語：specify）」の意味でも用いられます【使徒の働き25章27節】。

**黙示録1章2節**　ヨハネは、神（創造主）のことばとイエス・キリストのあかし、すなわち、彼の見たすべでの事をあかした。

黙示録の著者は、ヨハネであると確認されています。そして、初期のクリスチャン執筆者たちの一致したあかしは、事実使徒ヨハネであったとされています。それにもかかわらず、自由主義者たちはしばしば、それは別のヨハネだと主張してきました。その大きな理由は、黙示録の用語がヨハネの福音書や書簡の用語とは異なっているように思われたからです。しかし、この節は明らかに次のことを主張しています。すなわち、黙示録を書いたヨハネは「神（創造主）」のことばと彼の見たすべでのことをあかした「まさにその人であつ

た。また、用語研究は、明らかに黙示録の著者がヨハネの福音書や書簡の著者であることを確認しています。「あかしする（bear record）」の句（ギリシャ語のマルトウレオは、「あかしする（英語：testify）」、「あかしする（英語：bear witness）」または「あかしする（英語：bear testimony）」すなわち、マルトウレオということばは、事実上、ヨハネに特徴的で、ヨハネの書いたものに五十四回出て来ますが、新約聖書のほかの書すべてを合わせても二十五回です。ここで、ヨハネは、まさに創造主のことばに関して、黙示録であかししていると強調しているのです。さらに彼は「イエス・キリストのあかし」に関してあかししています。この「あかし（英語：testimony）」ということばは、またヨハネが好んで用いた特徴あることば（ギリシャ語マルトウリア）です。ヨハネの著書には三〇回出てくるのに、ヨハネ以外の著者の書いた新約聖書には全部で7回しか出てきません。

こういうわけで、主張している事実と主張に当たつてのことばから疑いの余地がないほど確かな事は、主の愛された弟子が、ヨハネその人であり、また、創造主から人に宛てた最後のことばを書くために選ばれた大使徒であったことです。

ヨハネが書いた記録の三重の性格に注意して下さい。（1）「創造主のことば」その全体の書は、実に創造主の靈感によって書かれたと強調している。（2）イエス・キリストのあかし　イエス・キリストご自身が、この書、すなわち黙示録を通してヨハネにしばしばなされた声明に言及している。そして、（3）「ヨハネが見たこと」　ヨハネが記録しつつある天と地に将来起こる大いなる出来事は、天使の特別な使命を通してヨハネが「見る」ことを許された出来事あり、その天使は、奇跡的にも大いなる出来事をヨハネに示したのです。

この節は極めて重要な事実を強調していて黙示録は、真の出来事と実在した人々を実際に目撃した証人の

記録なのです。創世記がまさに世界の原初の人々と出来事の記録であるように、黙示録は、歴史の終わりの出来事の記録で、そこに居合わせた人によって書かれました。ヨハネは、奇跡的に時間と宇宙空間を創造された創造主によって、超自然的に時間と空間を移され、将来起こるこれらの歴史上の重大な出来事を実際に聞き出すことができたのです。

自分が見、聞いた事だけを書いたと強調できるようにヨハネは、常に注意していました。ヨハネが書いた福音書の終わりの段落で、「これらのことについてあかしした者、またこれらのことを書いた者は、その弟子である。そして、私たちは、彼のあかしが真実であることを、知っている」〔ヨハネによる福音書21章24節〕と書きました。十字架上の驚くべき出来事を書くに当たって、彼は「それを目撃した者があかしをしているのである。そのあかしは真実である。その人が、あなたがたにも信じさせるために、真実を話すということをよく知っているのである」〔ヨハネによる福音書19章35節〕と書いています。また、ヨハネの第Iの手紙の冒頭のことばで、彼は、自分が書いているまさにその方を実際に見、聞き、触れたとまたもや強調し、次のあかしのことば「私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝える」〔Iヨハネの手紙1章3節〕と締めくくっています。

同様に、黙示録の中で、ヨハネは何度も自分が書いたこれら驚くべき未来の光景すべてを目で見、耳で聞いたと主張しています。事実、この主張は「七つの封印」で強く印象づけてさえいます。すなわち、ヨハネは「私は聞いた」との主張を二十八回（すなわち、七の四倍）、そして、「私は見た（英語：I saw）」（または、「私は見た（英語：I looked）」または「私はじっと見た（英語：I beheld）」は、すべて同じギリシャ語の翻訳）を四十九回、すなわち七の七倍述べています。事実、この句は、黙示録で他の新訳聖書のどの書よりもしばしば用いられています。

なによりも考え違いをしないように、ヨハネは、彼自身の夢や想像した物事を書いているのではないことを私たちに知らせたかったはずで、ヨハネは見たこと聞いたことを詳しく書いたが、それ以外のものは何も書かなかったのです。私たちにとって黙示録は預言です。ヨハネにとって、それは自分が観察した通りに記録した真の歴史でした。

**黙示録1章3節** この預言の言葉を朗読する者と、それを聞いて、その中に書かれていることを守る者たちとは、さいわいである。時が近づいているからである。〔協会訳〕

この預言の書のことばを読み、それを聞き、そしてその中に書かれていることを「守る」すべての人に、特別な祝福が約束されています（強調点がおかれていたのはテーマについてではなく、ことばであることに注意せよ）。持っていないものを保ち続けることはできず、それによって祝福され得ないのは明らかです。したがって、この素晴らしい約束は、これらのことばを読み、聞く人が、それらを十分に理解し、自分のものとすることが出来ることを明らかに必要条件としています。そして、もしこのことばを文字通りに取るなら、このことだけが本当なのです。

「時」が差し迫っていることを認めるようにとの勧告は、黙示録の終わりに〔黙示録22章10節〕はつきり繰り返されています。もしヨハネの時代のクリスチャンにとって、この書の預言を学ぶことが差し迫って必要だったとしたら、実際にすべてが起るときにより近づいている一九〇〇年代（翻訳時二〇〇〇年代）にいる私たちにとって、それはますます差し迫って必要なはずで、

## ヨハネの挨拶

黙示録1章4節 ヨハネからアジアにある七つの教会へ。今いまし、昔いまし、やがてきたるべきかたから、また、その御座の前にある七つの霊から、【協会訳】

黙示録にたくさんある「七」の最初がここにあり（前の章の検討を参照）、それは、ヨハネの「七つの教会」への挨拶です。 明らかなる事は、このメッセージは、確かに全世紀の全教会にあてられて書かれているのであり、ヨハネが彼のメッセージを「特定の教会」に対してではなく、また「アジアの特定の教会」でさえなく、「複数の教会」に当てていることは実に意義深いことです。キリストのメッセージは、実在し、見ることが出来る地域教会のメンバーと、その活動を通してあちこちの地域教会に伝えられるはずで、「普遍的な教会」と呼ばれ見ることのできない非現実的なからだ（教会）に対してではありません。たとえすべての教会がここで心に留められているとしても、ヨハネを通してキリストは、全世界のすべてのどこにでもある教会の代表として小アジアにある七つの代表的教会を選ばれたのです。

ヨハネはパウロの手紙でよく用いられている挨拶「恵みと平安があるように」で始めています（パウロもローマ、コリント、ガラテヤ人への手紙テヤ、エペソ、ピリピ、コロサイ人への手紙サイ、テサロニケの丁度七つの教会に聖霊に導かれて手紙を書きました）。しかし、パウロは常に父なる創造主と主イエス・キリストか

ら来る恵みと平安を言い表わしていますが、ヨハネは完全に三位一体の方に祈りをささげています。

第一に、恵と平安は「今いまし、昔いまし、やがてきたるべきかた」【協会訳】から来、創造主は永遠に全能で「光の父、……父には、変化とか回転の影とかいうものはない」【ヤコブの手紙1章17節・協会訳】方であり、「とこしえの父」【イザヤ書9章6節・協会訳】、「いと高く、いと上なる者、とこしえに住む者」【イザヤ書57章15節・協会訳】なのです。

それから、恵みと平安は御座の前にある「七つの霊」【協会訳】から来ます。永遠なる方の御名とイエス・キリストの御名との間に、この特別な名がおかれていることを考慮して、これは必然的に聖霊に対する言及で、もしそうでなければ、考えられることとして七つの大いなる御使いの霊があります。

では、創造主はなぜ「七つの霊」と呼ばれるのでしょうか。それにはイザヤ書11章2節に言及されている「主の霊……知恵と悟りの霊、深慮と才能の霊、主を知る知識と主を恐れる霊」【協会訳】という言葉が鍵になることを暗に示しています。聖霊は霊的属性である創造主の恵み深い性質と霊的属性に帰される七つの部分から成っています。この節は、その象徴的な七によって、聖霊は実際に「御座の前」にいと同時に、またどこにでも遍在されることを強調しているのかも知れません。

黙示録1章5節 また、忠実な証人、死者の中から最初によみがえられた方、地上の王たちの支配者であるイエス・キリストから、恵みと平安が、あなたがたにあるように。イエス・キリストは私たちを愛して、その血によって私たちを罪から解放し、…

あいさつはイエス・キリストから来る恵みと平安の祈りを含んでおり、こうして、完全な三位一体を組み

入れています。ヨハネはまた三つのすばらしい称号は、キリストに属すると考えています。『これらの称号は、それぞれ、死に至るまで苦しまれた罪なき方、墓から復活して死に打ち勝たれた方と、勝利ある再臨が差し迫った方と証言しています。用語の「あかし (witness)」(ギリシャ語マルトウス) は、英語の「martyr (殉教)」ということばの語源です。イエス・キリストは、それ以前のまたはそれ以後の創造主の真理に対する多くの他の「証人」のように、死に至るまで忠実な殉教者でした。しかし、イエス・キリストは他の殉教者と異なつて、自分の生命を捨てる権威があり、それをもう一度得る権威を持つておられました(ヨハネによる福音書10章18節)。こうして、死者の中から最初に生まれた方(使徒の働き13章33節、コロサイ人への手紙1章18節を参照)となられました。地上の多くの王や偉大な人々が、絶えずキリストに逆らおうとされています(詩篇2篇1〜3節)が、キリストは「王子(英語: prince)」(ギリシャ語アーコン)、「主(英語: chief)」、「第一(英語: first)」の方であり、まもなく「王の王、主の主」と認められなければならない方です(黙示録19章16節)。

ヨハネがこの主からのわくわくするようなあかしを詳しく話す時、ヨハネは主への賛歌を献じざるを得ないので。キリストは、私たちが罪から解放するためにご自身の罪のない血を提供されるほどに私たち―失われた罪人―を愛された唯一の方です。

**黙示録1章6節** また、私たちが王国とし、ご自分の父である神(創造主)のために祭司としてくださった方である。キリストに栄光と力が、とこしえにあるように。アーメン。

罪の咎と力からきよめられて、私たちはもはや罪のしもべ(奴隸)ではないのです(ローマ人への手紙6章20〜22節)。

しかし、私たちが愛された方にとって、これはほんの初めです。奴隸であった人々が王となり、祭司となり(または「祭司の王国」、キリストと共に天の所に座し(エペソ人への手紙2章6節)、聖なる祭司として仕え、創造主へ霊のささげものをささげ(1ペテロの手紙2章5節)ます。キリストの約束は、来るべき王国で、私たちが実際に「キリストと共に治める」(黙示録20章6節、IIテモテへの手紙2章12節)との約束です。しかし、私たちはキリストと共に治めるとは言え、私たちはなお彼のしもべ(黙示録22章3節)で、キリストの栄光と支配が永遠であると知ることが私たちにとって喜びです。

**黙示録1章7節** 見よ、彼が、雲に乗って来られる。すべての目、ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る。地上の諸族はみな、彼のゆえに嘆く。しかし。アーメン。

ヨハネはこの情報のために新しい啓示を必要とはしません。なぜなら、この情報は、前もって、聖書に書かれていたからです。キリストが雲に乗って来られることは、主ご自身によって、すべての人がキリストを見て嘆き悲しむ事実とともに、すでに弟子たちに告げられていました(マタイによる福音書24章30節)。ヨハネ自身、ローマ人の槍で突き刺されたキリストを見(ヨハネによる福音書19章34節)、その時、キリストの脇から血と水が混じり合つて流れ出たのを見て、ヨハネは驚嘆したのです。このことは、ヨハネにゼカリヤ書12章10節の大きいなる預言を思い起こさせました。そこに、祖先を通してキリストの死を要求したエルサレムの住人が、いつか彼らが突き刺した方を見て、彼のために嘆き悲しむと、主は保証しておられました(ヨハネによる福音書19章37節)。ここでヨハネはその預言とともに、主がオリブ山でなされた預言を思い出し、それら預言の最終的達成を、まさ

第1章 に幻で日撃し始めていることを認識し、それから、崇高な「アーメン」ということばが心の底からほとばしり出て書き記しています。

黙示録1章8節 今いまし、昔いまし、やがてきたるべき者、全能者にして主なる神(創造主)が仰せになる、「わたしはアルパであり、オメガである。」【協会訳】

神(創造主)である主、常にいまし、昔いまし、後に来られる方、万物の支配者がこう言われる。「わたしはアルパであり、オメガである。」

ここにヨハネが天から実際に聞いた最初のことばがあり、ヨハネをその仕事に取りかからせました。これらの最初のことばは、人の子(13節)キリスト御自身から来ていました。しかも、ヨハネは4節で父なる創造主に対して用いた同じ用語(常にいまし、昔いまし、やがてきたるべき方)を用いて、キリストを記述しています。また、これらの最初のことばは、黙示録に七回も出て来る大切な「私は……である(英訳:I am's)」の最初です。そして、独立自存の創造主に対して、さらにこれ以上輝かしい包括的な主張を心に描く事はできません。「アルパでありオメガである」方!ことばである方は、言語自体のすべての最初の文字から最後の文字まで、そこにあるすべての知り得ること、存在するものすべてを構成しているのです。キリストのうちに「知恵と知識との宝がすべて隠されているのです。」【コロサイ人への手紙2章3節】。

さらに、彼は全能です。ギリシャ語のパントクラトルということばは、「すべての権力を持つ方」という意味です。この方は全能で、同時に、永遠で全知です。そして、この方こそイエス・キリストです。キリストは私たちを愛し、ご自身の血で私たちの罪を洗い流して下さいました。黙示録が4節の「アジアにある七つの教会へ」で始まり、黙示録22章21節の祝福のことば「主イエスの恵みが、一同の者と共にあるように」で終わっているのは少しも不思議ではありません。

## ありのままのキリスト

黙示録1章9節 私ヨハネは、あなたがたの兄弟であり、あなたがたとともにイエスにある苦難と御国と忍耐とにあずかっている者であって、神(創造主)のことばとイエスのあかしとのゆえに、パトモスという島にいた。

このように、ヨハネはこの預言の書を送る教会の人々と自分を同じと見做しています。彼はキリストの使徒の最後の人で、あらゆる尊敬と高い評価を与えられていたが、彼は自分を兄弟たちの一人に過ぎないと考えていました。ヨハネは他のすべての使徒と、同時に数え切れない兄弟たちの命を奪ったありふれた迫害にあずかっていました。この時はローマ皇帝の中で最も残酷なドミティアヌス皇帝(紀元八一年〜九六年)の時代でした。ヨハネ自身拘留中でした。宣教のゆえにエーゲ海の小さな不毛の島に追放されていたのです。

彼の違反は、彼のことばによると、まさに、六十年以上にもわたって「有罪」とされて来た違反でした。それは、創造主のことば・キリストの証人となり、キリストのあかしをし続けていることです。(2節と比較)。

黙示録1章10節 私は、主の日に御霊に感じ、私のうしろにラツパの音のような大きな声を聞いた。

この「主の日」については、日曜日か主の日かで多くの議論があります。もし後者なら、ヨハネは、旧約聖書と新約聖書の多くの主題、やがて来る大いなる主の日に聖霊にあつて未来に移されたのです。彼の経験は、パウロの経験と同じようなものであつたのかも知れませんが「IIコリント人への手紙12章1〜4節」。

しかしながら、この解説には重大な問題があります。第一に、もしヨハネが「主の日（英訳 the day of the Lord）」を意味したなら、ヨハネはそのように言うべきだつたのです。「主の日（英訳 the Lord's day）」はまったく異なる構文で、「主が所有している日」を意味しています。この構文は、他にただ一度用いられています（「主の晩餐（英訳 the Lord's supper）」「Iコリント人への手紙11章20節」。第二に、ヨハネが来るべき主の日、未来に御霊によって移されたという仮定は、黙示録の最初の二つの章が実在していた当時の教会の状態を取り扱っている事実と矛盾しています。仮の天への移行は、教会に対するメッセージが終わるまで、起らなかったはずです。

他方、「日曜日」という解釈に反対する主な理由は、安息日の次の日を主の日（英訳 the Lord's day）と読んでいるところは聖書のどこにもないということです。主の日という用語の使用で、私たちが知り得る最も古い日は、ヨハネの死後百年経つた後です。

しかしながら、これはわざわざ言う必要のないことです。事実、この表現は、聖書のほかの所で「週の初めの日」として知られている日に対して、ヨハネが初めて当てはめたのはもつともです。このような場合、後で用いられた用語のほうが現代につながるので、ヨハネがここで創作し用い始めた可能性さえあるのです。キリストの復活の日と主の日を同じとする十分な理由が確かにあるのです。初期のクリスチャンたちは、少なくとも記録されている二つの事例「使徒の働き20章7節、Iコリント人への手紙16章2節」からわかるように、この出来事が起こるずっと以前からこの日、週の始めの日に礼拝を始めていました。

不確かな所はあるものの、証拠から見ても、ヨハネが、御霊に感じて瞑想と祈りに従事していたときであった事を示していると思われまます。それは、ある日、とりもなおさず週の初めの日、不毛の囚われの地で、愛する主を思い出していたとき、彼の後ろで非常に大きい声を聞いたのです。それは、ラツパのように大きく明瞭な声だつたのです。突然、ヨハネは、すばらしい主の日に、主ご自身が天から下ってきて、ヨハネと共にいてくださることを知つたのです。それは、新しい時代をヨハネに示すためでした。

黙示録1章11節 その声はこう言った。「あなたの見ることを巻き物にして、七つの教会、すなわち、エペソ、スミルナ、ヘルガモ、テアテラ、サルデス、フィラデルフィヤ、ラオデキヤに送りなさい。」

声は「私は……ある（英訳 I am）」を繰り返しています。アルファとオメガはギリシャ語のアルファベットの最初と最後の文字です。したがって、このまたとない主張は、すべての存在、すべての知識、すべての実体を含んでいます。さらに、それはイザヤを通して創造主ご自身が三回も宣言している主張と同じです「イザヤ書44章4節、44章6、48章12節」。

ついで、命令が来ました。「あなたの見ることを巻き物にしるせ」と。ちょうどアダムの歴史の記録にあつた「創

世記5章1節)のように、最後の世代の書があるべきです。両者共にすべての世代の人々を固くつなぎとめ、導く役目を果たしています。最初に、この書(ギリシャ語ビブリオンというこのことばが語源となり英語の「Bible(聖書)」がでた)は、七つの教会に送られるはずでした。明らかにヨハネはこれらの七つの教会に仕えていました。これら七つの教会は、すべて小アジアの南西部にあり、多少なりともパトモス島に面しており、その島にヨハネは閉じ込められていました。これらの都市は時計方向に順に挙げる事が出来ます。すなわち、海岸にあるエペソから始まって、北の方にスミルナとペルガモ、東にテアテラ、南東へサルデス、フィラデルフィヤ、ラオデキヤで、最後はエペソの真東で内陸に当たります。

**黙示録1章12節**　そこで私は、私に語りかける声を見ようとして振り向いた。振り向くと、七つの金の燭台が見えた。

ラッパのように大きな声がヨハネの後ろでしました。そこで、彼が振り向くと、肉眼ではかつて見たこともない実にすばらしい光景が見えました。栄化されたキリスト御自身が七つの金の燭台の真中にいたのです。これらの「燭台」は、おそらくヨハネにメノラを思い出させたことでしょう。幕屋の燭台で、燭台の各々はひとつの支柱に、六つの枝をもっていました[出エジプト記25章31節]。しかし、ヨハネが見た燭台は七つの同じ枝を持っていました。

**黙示録1章13節**　それらの燭台の真中には、足までたれた衣を着て、胸に金の帯を締めた、人の子のよう

な方が見えた。

語られた方は、燭台の「真中」におられた。ヨハネはずっと以前にキリストがお建てになる教会について主が言われたことを聞いていました。「ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです」[マタイによる福音書18章20節]。燭台は教会を表わしていました。その各々の教会はイエス・キリストのあかしのために大艱難を耐えてきましたが、キリストがなお彼らの真中にいることを、主は彼らに思い起こさせたかったのです。

そして、栄光ある主の出現にもかかわらず、ヨハネはキリストを人として認めました。その人こそ、人の代表、まことの人、人とはどうあるべきかを創造主が意図された人の子、その方でした。この「人の子」という用語は、キリストがご自分を指して好んで用いられたことばで、四福音書に八十回以上用いました。この用語は、詩篇3篇4節で最初に用いられています。そこにキリストが最初に来られる時にいやしい姿をとられると預言しており、黙示録14章14節では、二回目に来られるときに、キリストは力を帯びておられると預言しています。

キリストは本当の人とはいえ、キリストは人の子に似ているだけです。アダムも人でしたが、人の子ではなかった。イエス・キリストは「人間と同じようになられたのです」[ピリピ人への手紙2章7節]。キリストは「兄弟たちと同じように」になりました[ヘブル人への手紙2章17節]。キリストは「罪ある肉と同じような形で」遣わされました[ローマ人への手紙8章3節]。キリストは罪ある男と罪ある女との結びつきによって生まれたのではなく(罪あるという用語は、キリスト以外のすべての人に当てはまり、ヨセフやマリアにも当てはまります)、聖霊によって身ごもったのであり、処女降誕です。それにもかかわらず、キリストは永遠に人の子に似ているはず

キリストの衣の完全さにも注意してください。天の住民の中には、裸の人また半裸体の人はいません。キリストは十字架上で罪となられたとき裸にさせられました。しかし、天でも新しい地でも、キリストは常にふさわしく盛装しておられ、キリストのしもべたちもみな同じようにふさわしい装いをしています。

**黙示録1章14節** その頭と髪の毛は、白い羊毛のように、また雪のように白く、その目は、燃える炎のようであった。

今日こんにち生きている人で、キリストが地上におられた間どのような御姿で日々を過ごされたかを知っている人はだれもいません。しかし、想像して描かれたキリストの絵は、数え切れないほど多くの家や教会に飾られています。新約聖書の著者たちは、誰一人、キリストの肉体的特徴……背が低かったか高かったか、黒い肌色をしていたか白かったか、瘡せていたか肥っていたか……について語っている人はいません。この省略は重要で……キリストは人類の代表です。その上、彼の御姿がどうであったとしても、キリストの現在の御姿はもっと大切です。なぜなら、私たちがお目にかかるのはこの御姿だからです。そしてこの御姿がこれからの全時代を通しての御姿となるのです。ヨハネはキリストの現在と将来の御姿を書いているのです。

最も顕著な特徴は、キリストの雪のように白い髪です。ダニエルは同じ御姿を見ました。「年を経た方が座に着かれた。その衣は雪のように白く、頭の毛は混じりけのない羊の毛のようであった」〔ダニエル書7章9節〕。

イザヤ書9章6節は、キリストを「永遠の父」と語っています。頭を飾っている白い髪（新約聖書では、あごひげについてはまったく触れていません）は、明らかにキリストが長生きしていたことを語っています。このことは、現代の人々が若い外観を保とうとする物欲しげな願いとはよい対照です……彼らは灰色の毛を隠すため染料を用いさえるのです。聖書は言います。「若い人の栄えはその力、老人の美しさはそのしらがである」〔箴言20章29節・協会誌〕。「しらがは栄えの冠である、正しく生きることによってそれが得られる」〔箴言16章31節・協会誌〕。聖書は「私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜなら、そのとき、私たちはキリストのありのまま……の姿を見るからです」〔「ヨハネの手紙3章2節」と約束しています。注意して下さい。私たちは過去のキリストではなく、現在のキリストの姿を見るのです。

キリストの目は、あたかも怒りで燃えているようでした。この御姿はテアテラの姦淫の教会で特に見られたものです〔黙示録2章18節〕。多分、これは人の必要を覚えて泣かれた同じ目なのです〔ヨハネによる福音書11章35節、ルカによる福音書19章14節〕。キリストの目はすべてを知っておられるようにすべてを見ておられます。「神（創造主）の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神（創造主）に対して弁明をするのです」〔ヘブル人への手紙4章13節〕。

**黙示録1章15節** その足は、炬で精練されて光り輝くしんちゅうのようであり、その声は大水の音のようであった。

キリストの足は、かつてあらひ釘で打ち抜かれました。そして栄光の御身体にさえ、なおその傷は残って

いました「ルカによる福音書24章39節、40節」。しかし、これらの同じ足が敵を踏みつけます〔詩篇一一〇篇1節、イザ63章3節〕。ここでは裁きさばの様子がきわだっています。あたかも、足には、しんちゅうの長靴を履いているようで、その長靴は、踏みつけている裁きさばの大なる炉で、白熱に熱せられていました。

「そのことばの声は群衆の声のようであった」〔タニエル書10章6節〕。ラッパのように明瞭で力強く、海のように広く深く……声はヨハネにそのように思われた。……これは、ある日、死人を甦よみがえらせる声であり〔ヨハネによる福音書5章28、29節〕、万象を呼び出したのと同じ声です〔詩篇33篇6節〕。

黙示録1章16節　また、右手に七つの星を持ち、口からは鋭い両刃の剣が出ており、顔は強く照り輝く太陽のようであった。

キリストは教会の真中におられたが、キリストは右手にある七つの星で象徴している教会の天使たちを保ち続けています。「星」（ギリシャ語アスター）ということばは、天にある光のどれをも……現代の科学的常識での星と同様に隕石・惑星など……を意味し得ます。人の子の尊厳は、顔は光り輝く太陽のようで、手にあるものは輝く星のようで、共にパトモスの空を背景に明らかに配置されたかのようでした。

鋭い両刃の剣は、他の聖書の箇所へブル人への手紙4章12節、エペソ人への手紙6章17節〕で、創造主のことば（主イエス）の力になぞらえられています。ここでは、明らかに裁きさばについて語っているのです〔黙示録19章15節と比較せよ〕。栄光をたたえるキリストの御姿と、目をくらますように光り輝くキリストの御顔から発せられている威厳のある声の響きは、それぞれのことばに剣のような輝きと鋭さを与え、まるで目に見えるようでした。

## 地獄のかぎ

黙示録1章17節　それで私は、この方を見たとき、その足元に倒れて死者のようになった。しかし彼は右手を私の上に置いてこう言われた。「恐れるな。わたしは、最初であり、最後であり、

聖書で「恐れるな」という最初のことばは、「私は……である」ということばが聖書に最初に出てくる直前にあります。すなわち、「アブラハムよ。恐れるな。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きい」〔創世記15章1節〕。死すべき罪深い人にとって、生ける創造主の前に出ることは死であり、このことはヨハネがもし「霊にあつて」でなかったなら死であつたはずです。七つの星を持たれる手はヨハネの上におかれ、キリストの口から出ている両刃の剣は、裁きさばではなく平和を語っていました。ヨハネは恐れる必要がなかったのです。なぜなら、語られた方は彼の創造主（「最初であり最後である方」）であつたばかりでなく、彼のために死に、死からよみがえられた彼の救い主でもあつたからです。

黙示録1章18節　生きている者である。わたしは死んだが、見よ、いつまでも生きている。また、死とハデスとのかぎを持っている。

これは聖書の中で最も抜きん出たことばのひとつであり、キリストの最も驚くべき素晴らしい主張のひとつ

つです。多くの宗教哲学の学者たちと同じように、科学者たちは生と死のかぎを探して来ましたが、キリストがかぎを持っていると主張していると主張しておられます。さらに、キリストは地獄（ギリシヤ語ハデス）のかぎを持っていると主張しています。新約聖書のハデスは、ヘブル語のシェオル（黄泉）と同じです。両方共に肉体から去った霊の住みかを描写したことばです。

もちろん、科学界の見解は、ハデスも天国も共に実在しないというものです。他方、一般大衆の見方は両者とともに存在するが、ある種の異なる存在状態で、私たちが住んでいる物質世界の枠組みの完全に外にあるというものです。しかしながら、事実は聖書が明らかに教えていて、それは天国と地獄は共に、現宇宙に文字通り存在するとしています。そして、この教えは現代科学のどのような検討によっても否定できません。

主イエスが十字架上で死に、御身体が墓に横たえられたとき、キリストの霊は「地の低い所に下られた」[「エペソ人への手紙4章9節」]のです。これらの地の低い所は、「深み（英訳 the deep）」（文字通りには、ロマ10章7節にあるようにギリシヤ語アビュッソスに由来する「the abyss（深淵）」）とも呼ばれ、明らかにハデスと同じです。しかし、詩篇16篇10節の預言の成就について、「それで後のことを予見して、キリストの復活について、『彼はハデスに捨てて置かれず、その肉体は朽ち果てない。』と語ったのです。」「使徒の働き2章31節」と記されています。

キリストがハデスに下るまで、ハデスはそれ以前に生を受け、死んだすべての人々の魂と霊の住み家でした。キリストを信じて死んだ人々は、ハデスの1区画で「慰められ」ていました。他のすべての人々は、これらの人々から「大きな淵」で分けられ「なげき悲しんでいた」のです[ルカによる福音書16章23〜26節参照。カルバリーの十字架以前の信徒は、創造主に守られて安全でした。彼らは、いつの日か贖いの代価が払われて自由にさ

れるという創造主のことばを信じていたのです。』そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした」[「ヘブル人への手紙2章14、15節」]。

それゆえ、キリストが、なお牢に閉じ込められている悪しき霊の所に行つて、勝利を宣言された後[「ペテロの手紙3章18〜20節参照」]、「高い所に上った時、とりこを捕えて引き行き、……降りてこられた者自身は、同時に、あらゆるものに満ちるために、もろもろの天の上にまで上られた方なのである」[「エペソ人への手紙4章8〜10節」]。

このすべては、キリストによる素晴らしい主張を意味します。すなわち、キリストは、今、ハデスと死の鍵かぎそのものを持っているとの主張です。「キリストは死者の中からよみがえって、もはや死ぬことはなく、死はもはやキリストを支配しないことを、私たちは知っている」[「ローマ人への手紙6章9節」]「したがって、ご自分によって神（創造主）に近づく人々を、完全に救うことができになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです」[「ヘブル人への手紙7章25節」]。

それ以来、キリストにあつて死んだ人々は「キリストとともに」[「ピリピ人への手紙1章23節」]天に移されています。救われなくて死んだ人々はハデスにとどまります。そこから彼らは後に永遠のさばきの座に連れ出されます[「黙示録20章13節」]。地球の中心にある大いなる淵は、しばし、罪の中に滅びつつある大衆に「のどを広げ、口を限りなくあけ」[「イザヤ書5章14節」]続けています。

## 教会の御使い

黙示録1章19節　そこで、あなたの見た事、今ある事、この後に起こる事を書きしるせ。

これらのすばらしい啓示の結論は「それゆえ、書きしるせ」です。黙示録の注解者のほとんどが、ここにある三重の区分に注意しています。すなわち、

①「あなたの見た事」とは、おそらくヨハネ自身が直接見ていることだけでなく、ヨハネ自身、主な当事者であった使徒時代の大きいなる出来事すべてを含めて。②「今ある事」とは、特にヨハネの時代の教会が置かれていた状態は、教会時代を通してすべての教会の必要を表わしている。③「この後に起こる事」とは、黙示録4章1節に同じことばを用いて、このことが、すなわちさばきの時代、千年王国と新しい地として書かれている黙示録4章から後に起こる出来事と同じであることを明らかにしている。

最後の節は文字通りに「この後に起こること」です。すなわち、黙示録2章から3章に書かれている出来事の後に起こる事です。これらの教会のうち三つの教会への勧めで、少なくとも、キリストの再臨について特別な言及をしているので〔黙示録2章25節、3章3、11節〕、少なくとも、第三区分は再臨の初段階の後に起こる出来事に関連している強力な証拠と言えるのです。

黙示録1章20節　わたしの右の手の中间に見えた七つの星と、七つの金の燭台について、その秘められた意味を言えば、七つの星は七つの教会の御使いたち、七つの燭台は七つの教会である。

この節が示している事実は、黙示録で象徴的なことばが用いられる時、その象徴的なことばはその節内のことばの靈性を説明しているのです。比喩的解説者による空想的提案を受け入れるべきではありません。大きな燭台は光を灯している教会を象徴し、星々は教会の御使いたちを表わしています。

しかし、これらの天使たちとは誰でしょうか。現代の解説者の圧倒的多数の人々が、彼らは教会の牧師たちを表すと言います。ギリシャ語はアンゲロスで、明らかに、基本的な意味は「メッセンジャー（使節）」です。しかし、このことばは新約聖書に百八十八回用いられており、実際に（せいぜい六回くらいを除いて）いつも人のメッセンジャーというよりも、本当の天使を意味しています。もしメッセンジャーが真の天使以外の何ものかを意味するならば、前後関係からそのことをはっきり指し示しているはずだと思われれます。

もし、この「御使い」が「牧師」を意味するならば、この意味で用いられているのはここだけで、他にはどこにもないのです。もし主イエスが御使いを教会の牧師たちを意味するとしたなら、キリストはなぜ「牧師たち」と言わなかったのでしょうか。または、なぜ「長老たち」と言わなかったのでしょうか。この用語は新約聖書では本質的に「牧師」と同意語として用いられています。そして、長老ということばは、後で、黙示録に十二回用いられています。

その代わりに、キリストは教会の御使いたちについて語りました。そして、このことばは黙示録の他のところで六十七回も用いられています。そのうち一回も「牧師」の意味で用いられたところはないのです。無理のない厳密な解釈の原理は、主にある真の教会は、彼らを導き守護するために割り当てられた天使をそれぞれ持っていることを理解するようにと私たちに要求しているようです。

## 第1章

この事實は、無数の御使い「ヘブル人への手紙12章22節」と、救いの相続者になる人々に仕える霊として彼らに割り当てられた働き「ヘブル人への手紙書1章14節」を考慮しても驚くには当たりません。個々の信徒はひとりひとりに割り当てられた天使を持っています「マタイによる福音書18章10節、使徒12章15節」。天使たちは礼拝の間、その群の中にいて「コリント人への手紙11章10節」、その信仰の成長に強い関心を持っています「コリント人への手紙4章9節、エペ3章10節、1テモテへの手紙3章16節、1テモテへの手紙5章21節、ヘブ13章2節、1ペテ1章12節」。

明らかに、創造主の御使いが各教会に割り当てられていて、ある程度、その使命の効果に責任があるという考えは同じです。このことは、クリスチャンたちの間でほとんど認められていません。それにもかかわらず、このことは、主のことばがここで教えようとしているように思われます。また、象徴で表すことは天使たちに固有です。星々は、聖書ではしばしば天使たちと同一視されています。特に黙示録9章1節、11節、12章3〜9節ではそうです。

このように、教会への手紙は、実際に教会と教会員と監督者たちに宛てられました。しかし、それらの手紙は、どういうものか、教会の御使いを通して伝達されるはずでした。牧師たち、長老たち、執事たち、教師たち……これらの人はみな教会員の変動につれて時々変わる可能性があります。しかし、個々の教会は続いて行きます。ある時は何世代も続き、教会の御使いも教会と共に続きます。教会の会員が御使いを見ることが御使いと交わることもできなくても、御使いはそこにいるのです。そして御使いが保護し、そこで奉仕しているという知識そのものが、教会のすべての活動を力づけ教会を浄化する源であるはずで